

## 調べ方の今昔から学ぶ、教える:図書館情報講習の活用体験から

和田 敦彦（早稲田大学図書館副館長、教育・総合科学学術院教授）

### ◆初学者が陥りやすい落とし穴

学術の分野をとわず、いまや電子化された学術情報データベースが必須であることは共通している。私が専門としている日本文学の領域も例外ではない。論文目録のデータベースや辞書、事典類、さらには電子化された書籍や雑誌にいたるまで、研究の効率を大幅にあげてくれるツールは数多く、さらにその量は年々増加し、形を変えてもいる。

こうした電子情報をうまく活用できるかどうかによって、学生の手にする学術情報の量や質は大きく変わっていく。大学に入ってきた一年生にとって、この基礎的な情報リテラシーを身につけることが大きな課題となる。このため、私の教えている教育・総合科学学術院の国語国文学科では、一年生の必修科目である日本文学基礎演習の中に、こうした電子情報をはじめとする学術情報の基礎について学んでいくプログラムを組み込んでいくこととなった。2008年4月から始まったその取り組みのために、研究に有用な基礎文献の情報を集めた小冊子『国語国文学科で学ぶために』を学科スタッフ総出で作成した。この冊子は電子版も現在では公開しており、国語国文学科のホームページや早稲田大学図書館のホームページで閲覧可能であり、学内外で広く活用されている<sup>1</sup>。

さて、一方で早稲田大学図書館は、やはりこの時期から、すなわち大学創立 125 周年を迎え、大学の掲げた Waseda Next 125 に呼応し、こうした情報リテラシー教育を積極的に支援していく活動を展開していた<sup>2</sup>。2007 年度からは各学部で行われていた基礎的な学術情報講習と連携し、授業、ゼミ、専攻単位での講習会を多数実施し、教員からの要望に答える形をとっていく。目的を同じくしているこの図書館の活動は、学科にとっては渡りに船であり、2011 年の春からは、上記の新入生の基礎演習の中に、図書館側の情報リテラシー講習を組み込む形をとっていった。

図書館側でイメージし、行なう基礎的な情報リテラシー講習と、それぞれの専門分野でイメージ求めているそれとは、重なる部分も大きいがずれや違いもある。何を、何のために、

どこまで教えるかを、教員と図書館側職員とで話し合う機会が必要になるが、実はそこで互いに気づかされることや、新たな発見も少なくない。自身でも気づかされた点が多いが、ここでは特に重要だと思われた点を一つとりあげて、少し詳しく述べてみたい。これはまた、初学者がしばしば陥りやすく、かつ私自身最近頭を痛めている問題でもある。

### ◆CiNii にない雑誌はどこにあるのか

具体的な例で説明したい。図書館の情報講習を受けた後、演習で自身のテーマで調べ、報告していた一年生が、図書館にある論文が少ないとぼやいていた。そんなはずはない、大学図書館はかなり網羅的に学術雑誌をそろえているはず。そう答えた私にその学生は「CiNii にない雑誌はいったいどこにあるんですか？」と尋ねた。私はこの質問の意味がしばらく理解できなかった。CiNii Articles はご存じのように、学術論文の目録データベースで、国文学科でも、まず調べてみるデータベースの一つとして教えている。では「CiNii にない雑誌」とはどういうことか。

よく聴いてみると、この学生は、CiNii で検索し、そこにデジタル化された全文がリンクされているものを、「大学蔵書」と勘違いしていることが分かった。つまりその学生は「本文がオンラインで読めない＝大学蔵書にない」と思い込んでいたのだ。驚いたのは、そう思い込んでいた学生が複数いたことだ。

日本の場合、特に人文科学系では、論文本文のデジタル化、公開はまだ部分的にしかなされていない。日本文学研究の領域で言えば、論文が全文オンラインで読めるということと、その論文の質とは全く関係がないと言ってもよい。本文がデジタル化されている論を優先的に読むことは、むしろかなり偏った論文ばかり読むことになりかねず、かえって危険でさえある。だが一年生には当然それは分からない。むしろこれはそれぞれの専門分野の事情であって、図書館の職員側ではそこまで強い危機意識は当然抱けない。

だがこれはかなり深刻な問題だと日々意識させられている。

別の大学で教えていた折の例をもう一つあげておこう。やはり大学一年生の基礎的な演習の授業だったのだが、その学生は児童雑誌『赤い鳥』についての論文を集め、それらを論じるという目的をもっていた。その学生はまず教わったとおり CiNii で論文を検索し、184 件のリストを手に入れた。しかし多すぎる。どうやって絞り込むか。CiNii の簡易検索画面には検索窓のすぐ下に、絞り込みのためのオプションがもうけられている。それは CiNii で本文が読めるか、そうでないかというものである。そしてこの学生は「CiNii で本文あり」で絞り込んだ。

結果は劇的で、論文数はいっせいに 28 本にまで減り、学生はそのうちから読みやすそうな論文を 5 つ選んで内容をまとめ、めでたく作業は完了した。ちなみにこの学生が選んだ 5 つの「論文」は、1 つが書評、3 つは大学院生の学会発表要旨だった。むろん、一年生は、真剣にこれらを立派な「論文」と思って報告しているわけだが。

ここにはまた一種のディスプレイ・バイアスも作用している。例えば Google や Yahoo などの検索サイトで検索する際に、利用者は頁の一番上にあるサイト、あるいは 1 頁目のサイトを選ぶ傾向がある。簡単に言えば、私たちは、表示された順位、あるいは情報へのアクセスのしやすさを、それら情報の質と取り違えやすい。だからこそ、初学者には特にその危険性を強調しておかねばならない。

#### ◆「昔はこうやって調べた」と語ることの効用

これら現在の電子資料や各種データベースを初学者が活用する際に、意外に役に立つのは教員の「昔はこうやって調べた」という説明である。こうした便利なツールがなかった時期に、私たちがどうやって論文や資料を集めていたか。こうした話は得てして昔の苦労話や懐旧談のように思われがちだが(そして単にそうなる場合もある)、実際には情報を集め、選別する際の効果的な手順や戦略が豊富に含まれている。

例えば先の『赤い鳥』の場合、昔ならまず昨年度出た論文を集め、さらに少しずつ年度をさかのぼって集めていた。それらの論は、たいていそれまでの研究の総括や批判を含んでいるし、足を運んでいるうちに主要な雑誌やそれらがある書架に接して、次第にそれまでの研究状況が見えても来る。別にそうしたかったというよりも、主要な論文のタイトルは年

度ごとに『国文学年鑑』という冊子体で刊行されていたので、そうするしかなかったのである。だが、こうした手順がイメージできていれば、いきなり 184 件という数にとまどうことなく、例えば過去 5 年で絞り込んで、とりあえずそれを手に入れて読み進めていくということもできるだろう。

今日の電子情報や各種データベースを私たち教員や研究者が「便利」だと思うのは、便利でなかった時期の調べ方が自身の心身に刻み込まれているからなのである。最初からそれらのツールを与えられた学生達にとって、そもそもそれは「便利」なものでさえない、いやむしろとまどわせさえするものなのだ。

そういう意味で、基礎的な情報リテラシー講習をデザインする場合、「昔はこうやって調べた」話を、教員の側と図書館のスタッフ側とで、意見交換する際のポイントにしていくことは非常に有益である。それはまた個々の学問領域で、現在のデータベースや情報環境によって何ができるようになって、何ができなくなっているのか、ということを互いに認識するためにも有益だ。情報環境は、決して単なる右肩上がり成長をしているわけではない。得たメリットも大きければ、その便利さや簡略さゆえに看過されるようになったことも少なくない。

昨年度からは国文学科では大学院生を対象とした情報講習も試行的に始めたのだが、こうした問題を、教える側と受講者とで、ともに考えられるような場ができていけばと思う。

<sup>1</sup> 「KOKUTAME」のページ

<http://www.dept.edu.waseda.ac.jp/kokubun/kokutame.htm>

<sup>2</sup> 中元誠「『Waseda Next 125』と早稲田大学図書館の戦略的課題について」『ふみくら』No.78 (2010.03)

<http://www.wul.waseda.ac.jp/Libraries/fumi/78/78-02-05.pdf>